

座談会

総合情報学部の創設期を振り返って
— 8年半の歩み—

日 時 2013年5月26日(日曜日) 10:00-13:30

場 所 関西大学総合情報学部 第一会議室

出席者：

井上 宏 関西大学名誉教授
初代学部長代理 (平成6年4月～平成8年9月)^(注1)

水越 敏行 大阪大学名誉教授
第2代目学部長 (平成8年10月～平成10年9月)

宮下 文彬 関西大学名誉教授
第3代目学部長 (平成10年10月～平成14年9月)

陪席者：

木谷 晋市 関西大学副学長
第5代目学部長 (平成18年10月～平成24年9月)

堀 雅洋 総合情報学部教授
第6代目学部長 (平成24年10月～)

司 会：

谷本 奈穂 関西大学教授

江澤 義典 関西大学教授



1) 学部長代理は現在の副学部長に相当する当時の役職名である。

はじめに

谷本：今日は、総合情報学部の創設から20年目の高槻キャンパス祭を見て廻っていただきました。ご退職後の変化など懐かしく見て頂けたのではないかと存じます。さて、座談会ですが、ご自由に、お話をしていただきたいなと思っております。まず井上先生から、思い出されたことをしゃべっていただいて、次に水越先生にもお話していただいて、最後に宮下先生にもお話していただいたうえで、あとはどなたでもご自由にお話いただければと考えております。よろしいでしょうか。

1. 総合情報学部の設置構想

井上：以前、学部が構想された時期について振り返った座談会の記録がありましたよね。

谷本：はい、年史紀要がありました^(注2)。

井上：総合情報学部が設立される以前に、関大は「校地不足」という指摘を文部省から受けていて、新学部を作るには、校地問題を解決しなければならなかった。それで学校法人も本気で校地確保にのりだしたわけです。総合情報学部というのは土地のないところに土地を確保して、もちろん、学部の構想もその時なかったわけだし、カリキュラムももちろんね。だから、何もかもないところから大きな学部を作り上げたということになりますね。

先に挙げた年史紀要を読みまして、土地の取得から、総合情報学部にしたいきさつ、カリキュラム作りが大変だったとか、教員集めも大変、学生集めも大変、大変づくめの話が、当時（平成8年）の座談会で語られているなど思いました。



井上 宏先生

2. 文理総合学部の入試

井上：また、色々な制度改革ね。2年次への編入学^(注3)という制度もなかったしね。

2) 石川・森本・高木・井上：高槻キャンパスの開設—総合情報学部の経緯—，関西大学年史紀要，第9号，pp.4-31，(1997)。

3) 3年次からの編入生受け入れが通常であった。

木谷：しかも編入生の定員が100人もありました。

井上：2年次編入を、かなり多くの人数ですが確保するとか。入試改革もやりました。

だいたい関西大学は3科目入試だったんですよ。それを2科目入試に変えた。学部の理念を、「文理総合型」として、学生に対して、社会に対して、新しい学部、文理総合型の総合情報学部ですと強調してきたわけです。

木谷：試験もそれを反映して、英数国の3教科から2教科を選択して受験するという、文理どちらからでも受けられるというスタイルとってきたわけですね。

井上：そして、秋入学もね、今後、部分的には秋入学の制度も、採り入れられるのではないかね。秋の卒業式もあってね、学生が少ないからどういう挨拶したらいいか、難しかった。他学部ではやってないことをあえてね、やりだしたんです。

木谷：社会人入試、帰国生徒入試、それぞれ募集定員を明示していましたからね。

井上：その定員は文部省に届けた申請時の約束事でしたからね。社会人入試も帰国生徒入試も留学生入試も、きちんと定員確保でやるという。結局、秋入学制度というのは、やっぱり必要だということでやりましたね。

木谷：いまでも3~4人、入っていますよ。

宮下：東大がやろうとしていますけどね。われわれはもう20年前からやっている。

谷本：先取りですね。完全に。

井上：一期生の入試はものすごく難しかった。学生も優秀でした。

谷本：レベルが高かったと聞いています。

木谷：桁違いでした。理由はだいたい考えられるんですけどね。あの時期に入試をしたということが非常に大きかったということと、文理総合だったということと、それと情報ということ。

宮下：それが大きかったね。

木谷：当時、情報といえば理系の技術者育成だけだったのが、文系の者でも情報、いわゆるコンピューター教育が受けられる。ここで、3つの要素が非常に大きかったと思います。3月入試で、大手の大学で、東京でも2月くらいまでですからね。それが3月で大手の私大で、しかも文理総合で、コンピューター教育ができるという。それは、もう。



宮下文彬先生

谷本：期待が大きかったわけですね。

井上：それと優秀な子が、残ってくれるというのは、倍率というのは高くないとあかんね。たくさん受験生に受けてもらう。総合情報学部の一期生なんかは1万5千5百何人かの応募があった。でも、取れるのは270人なんです。たったそれだけの定員に1万5千人。

谷本：すごいですね。

井上：すごいでしょ。何倍になるのかな。

木谷：まあ2年編入を除いて400人くらいの定員なんですけれども、社会人入試とか推薦入試とか引いてね。一高入試^(注4)でも入ってくるとか、いわゆるその他入試の合格者をいろいろ引くとね、一般入試では270人くらいしかとれなかった。

井上：歩留り^(注5)もあるけれど、そういう意味ではかなり歩留りも高かったんやね。いい学生をいかに取るかということは、とても大事なことですからね。

3. 斬新な学部教育の仕組み

木谷：学生による授業評価もありましたが。

井上：そう、学生評価。あれも他学部はいっさい手を付けていないとき、総合情報学部で始めた^(注6)んですね。

4) 関西大学の併設校である関西大学第一高等学校の卒業見込者を対象とした入試制度のこと。

5) 一般的に、工業製品には不良品が含まれるが、不良品を取り除いて出荷できる製品の割合を歩留まりという。この場合は、入試合格者のうち実際に入学する学生数の割合をさす。

6) 学生評価項目などの具体案については、当時の学部設置準備委員会において、宮下先生が考案された原

井上：また、細かいことで言えば、休講はしないという学部にしよと決めたんですね。休講したら必ず土曜日に補講する。教員にとってはとてもしんどかったですが。

水越：うん、そうやな。

井上：他の学部では休講が安易に行われているんじゃないかという思いもあって、そういうことがない学部を作らんといかんと。他の学部との差別化もあったと思います。当たり前と言えども当たり前なんですけど、教員がしんどいと思うことを取ってやった。

木谷：千里山はいまだに土曜日に授業していますけれども、総合情報学部は、土曜日は授業は外して、補講日にしていますね。

井上：補講日を決めるという、他の学部で、話題にはなっていたけれども、取り組めない課題、それを総合情報学部は全部取り込んでスタートしたんですね。

谷本：それは「新しい学部を作るぞ」ということで、あえて全部取り入れられたんですね。

井上：そうですね。時代の流れの中でね。実際、準備段階から新しい学部の学生教育をどうするかというのは、ずい分議論が出ていたんです。新しい制度改革ですね。他の学部では全然まだ手が付けられてない、例えば、 Semester制^(注7)を取り入れるという問題とかね。もう論議されかけていたんですよ。やがてはそうなるだろうと。それを先に取り入れてやるという。

木谷：当時はまだ珍しかったと思います。

井上：そうですね。関西大学のどの学部も、かなり歴史があって、それなりの慣行があって、一つ制度を変えたら大変なんです。新しい科目、一科目置くだけでも、教授会で大変というね。改革がとても難しい状況にあった。

木谷：全学の合意が必要でしたね。今でもそうですけど。

案をもとに、慎重な検討がなされた。千里山にある情報処理センターの大型計算機システムに高槻キャンパスのパソコン教室からTSSでアクセスして、学生が各自の空き時間に回答するというオンライン・リアルタイム・システムで始めた。

7) 春学期と秋学期と2つのSemester毎に教科の単位認定を行う。

井上：総合情報学部の検討を始めたころ、私は社会学部にいたんですけどね、例えば社会学部で何か新しい提案を出してもね、実現が難しい。こんな科目作りたいからと、新しい科目の提案でもなかなか通らない。教授会メンバー全員の了解を得ないといかんから。学部の中で新しいことをするというのは大変でした。この総合情報学部の設置準備が始まってから、私自身は、その当時まだ総合情報学部に移籍するという覚悟はなかったけれども、新しいことができるかと期待していました。新しい学部作りというのは、それが一つの大きな魅力だったんですね。それで、総合情報学部が新しい制度を始めたでしょ。これは他学部に対するインパクトは相当大きかったと思うんです。本音を言えば、補講授業はしんどい、でも補講は必ずせないかんとかね。 Semester制も、通年の授業を春・秋で割って、しかも単位を学期ごとに独立させて認定するんで、試験もして、今まで4単位の講義科目やったら年1回の試験で済んでいたのが、2回も試験せないかん。そのたびに採点もせないかん。負担が増えたわけですよ。

木谷：授業内容も半分というわけにはいきませんからね。そうすると、どうしても3分の2くらいになりますからね。それを2つ作る形になりますから。

井上：それも、いわば、教育の効果を上げるという考え方ですよ。

水越：だいたい通年で授業するのが当たり前でしたから。

井上：そうそう。それと、シラバス^(注8)の作成と配布があったでしょ。

木谷：当時からシラバス作りましたからね。

井上：普通の講義でも、それに似たようなものをプリントして渡している先生もあったけれども、それは各人に任せられていて、総合情報学部では一斉にシラバスを作らないかん。シラバスをちゃんと本にして事前に学生に配らないかんということでやりましたね。

木谷：12回分の設計を全部しましたからね。

井上：ああいうことは、総合情報学部が率先してやったわけですよ。他学部はまだ全然手をつけていなかったですね。おそらく他学部から見たら、「ようやくしてくれるわ」みたいなね。

8) 毎週の授業内容を順に示し、教科書や参考書などと併せて履修生に予め告知する。

木谷：「何をするんや，お前のところは」って怒られましたわ。

井上：あの当時は，教養委員会^(注9)があったんやね。僕はその時分，教養委員もやっていたから，全学その会議で，総合情報学部のそういう説明をしたりしていました。

木谷：教養科目は無いですよ。最初から。

井上：そうそう。最初から教養科目^(注10)という分類は置いてないからね。オブザーバーみたいな立場で出席してね。その時に非常によく質問を受けました。総合情報学部は新しいことやるけれど，どんなことをやっているんですか，とかね。

木谷：あと外国語もね。主専攻がたとえば12単位。

井上：英語を12単位，副専攻を4単位にして。この制度も従来の学部では8単位ずつなんですよ。ね。また，英語の習熟度クラス編成とかね。そんなことをやりましたね。

木谷：最初，入学した時点で，トーフル試験していたんじゃないですかね。

井上：そうそう，トーフル^(注11)試験ね。

木谷：それで英語能力別のクラス分けしたという。

谷本：へえ～

木谷：今では，もうやっていませんけどね。

井上：そりゃまあ，手間ヒマ考えたら大変なことをね，最初だからできた。

木谷：あの時，英語の先生もいらっしゃいましたからね。

井上：画期的だったのは，1つの学部で英語専任の先生をもちましたね。何人でしたっけ？

9) 現在は共通教養教育推進委員会に組織変更されている。

10) 他学部では，2年間の教養課程で教養科目を履修し，その後で2年間の専門科目を履修する制度になっていた。

11) TOEFLのこと。

木谷：8人くらいでしたね。

井上：その先生方は総合情報学部の学生だけを対象にして、英語教育をやっていただくという。他学部に出講する必要がないわけやね。学部で専任の英語教員を抱えたのは、総合情報学部が初めてやね。従来は、英語の先生は文学部の所属で、教養ということで全学の様々な学部をみんなで散らばってね、教育されるということであってけれども。それも、思い切った措置でした。それは途中で変わりましたけどね。

木谷：外国語教育研究機構ができた時でしたね。それはまた、宮下先生の学部長時に話が出てくるんですけど。

井上：そういう他の学部がやってないことを総合情報学部は先駆けてやったわけです。そのあたりから、関西大学全体がね、変わりだしたわけですよ。その総合情報学部の先導的役割というのかな、それがずい分あったと思いますね。

木谷：入試にしてもそうですね。関西大学は2月の初めの1日から6日くらいまでだけやったのが、3月に実施するようになったのは、総合情報が初めて3月に実施した。それを4年間たって、完成年度になっても、3月入試を続けましょうということで、2月と3月両方やるようになったんですね。

宮下：あのおかげでね、歩留まりのコントロール^(注12)が非常にやりやすくなった。

井上：関西大学というのは、もともと非常に堅い大学だった。一旦決まったらなかなか変わらないみたいなね。

木谷：今でもそうですねよ。

井上：でもね、それがいろんな制度取り入れて変わりだしたのは、僕は総合情報学部がその先鞭をつけていったと思うな。

水越：そうそう、私もそう思います。

12) 2月入試の合格者のうち入学一次手続き完了者の割合がわかる段階で、3月入試の合否判定を行うので、最終的な歩留まりの推定をコントロールしやすくなったこと。

井上：その役割は大きかったのではないかと思うんですけどね。

4. 施設の整備

木谷：高木先生は2年半、学部長をやられて、その後に水越先生が務められて。この間にS棟とR棟が増設されているんですよね。これは要望が大きくて。

井上：学生棟は急がなあかんと。学生のたまり場は食堂しかなかったんですよ。

水越：なかった。なかった。

井上：その上に喫茶部がある。そこしなくて、学生の行き場がない。そして、自治会を作る。要求は出てくる。学生の要求にももっともなこともあるわけやからね。学生対応をきちんとしないと、あの、前の学園紛争^(注13)みたいに荒れる恐れもある。そんなことには絶対してはいかんと思っていました

木谷：スタートはA棟B棟C棟。それと体育館(G棟)、それにL棟。今の食堂があるところ。これしかなかったですからね。

水越：食堂の上にちょろっと喫茶店のようなものがあってね。

井上：学生はね、その時に行き場がないから、食堂で食べたなら、そこに居座ってしまうわけ。そしたら次に来た学生が食べるところがない。広い食堂なんだけど、みんなに居座られたら、もう食べるところがない。それも拡張せないかんという話で。どうしても学生棟を作らないかん。その時に合わせて、研究棟も作らないかん。理系の先生方の方では、あの個人研究室はとても狭いと注文が出ていた^(注14)。

木谷：理系の先生方と文系の先生方、いらっしゃって。文系の方は狭いのが当たり前だったんですけど、理系の方にとっては、これは何にもないぞという。

井上：そう、もうねえ、ボロクソに言われていました。

13) 文部科学省：大学紛争から大学改革へ、http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317827.htm。

14) 理工系の学部では学生指導に使うゼミの研究室が必要だとの常識があった。K棟が竣工したので、やっと懸案が解決したことになる。

木谷：逆に言ったら、理系、文系が一緒に入ったということが、また運営がなかなか大変だったところがあるんですよね。

水越：マルチメディアの部屋^(注15)をね、あの当時で、あれだけのマルチメディアの施設をきちんと備えた大学は、私学、国立を合わせてありませんでした。阪大にもマルチメディアのようなものがあつたんですけど、全然桁が違いましたね。私は阪大において設備をやっていたんですが、ここへ来たら桁違いなんですよ。本当に。

井上：あの衛星設備なんか、すごかったですよ。外国のチャンネルを直接受信して流せたんやから。

水越：レベルが違う。僕は、ここへ来た時に「ああ、これは立派なもんや」と思っていましたね。自由に院生が使ったりしており、ずい分助かりました。

井上：機材とか教室とかね、施設に対する先生方の要望がものすごく強かった。新しくここへ来た先生方、みんなやる気十分だったんですね。とにかく要求がきついですよ。この機材が足りない、あれも足りない、部屋も足りない。もう、そういう要望がものすごくあつたんですね。

木谷：リサーチハウスがその一つのね。

井上：そうそう。だからその1つとして、研究棟（R棟：リサーチハウス）というのを作って、これもね、チームを組んで交代に使うという形だったけれど…

木谷：6室でしたかね。

井上：コンピューターでも最先端コンピューターへの要求でね、もう何億円という。1年間に何回使うんですかって。「でも、いるんだ！」とかね。そういう要求がすごくあつた。

谷本：最初から最新の設備を揃えようとしたというよりは、各先生から要望があがってきて揃えたという側面が強いですか。

木谷：申請の時に、2～3年前に申請するから、その性能で申請するんですわ。

15) スタディオ棟（C棟）1階と地階の設備。

井上：もう古くなっていた。

谷本：で、「もっと新しいものを」と。

木谷：特に典型的なのはウインドウズ95。うちは94年にスタートしたから、前のシステム^(注16)なんですよ。95年の末にもう出るということが分かるわけですよ。そうしたら、それどうするんだよと。



水越敏行 先生

宮下：学生の方が新しいのを使っていて、大学の実習設備が古いやつを使こうてるということになりかねないからね。

谷本：それはまずいですよね。

木谷：それで、あれ、かなり無理して、6室あった実習教室のうち、2室を2年目にもう入れ替えて、ウインドウズ95を使わずに卒業してしまう学生がいたらまずいからということで、6室のうち2室をウインドウズ95に全部入れ替えたんですね。

井上：変化への対応が非常に難しい学部でしたよね。

木谷：ものすごい金額でしたからね。

江澤：当時は高かったからね。

木谷：実習室50台くらい入ってるところを、2室ですから100台ですわ。当時、数十万円、1台30万円から50万円くらいかかるわけで。

江澤：そうそう。

木谷：それに、いろんなソフト入れて。

宮下：当時、リースは出来なかった。買い取り。

16) 学部が創設された1994年4月にはWindows3.1が最新のパソコン用OSとして準備されていた。

木谷：買い取りだったんですわ。

宮下：余計と気づかったんですね。しかもその当時はまだ消耗年限が7年だった。

木谷：そうそう、5年じゃなくて、7年でしたね。

宮下：普通の教材器具と同じような年限設定でしたからね、ちょっと厳しかったですね。

木谷：その法人との交渉はなかなか大変だったと思いますわ。

井上：執行部は大変だったとしてもね、たくさんの要望が、多くの教員から出てきたということ、やっぱりええことですよ。それで活性化して回っていくというね。そういう展開は僕あったと思いますね。それは今日まで続いているんじゃないですか。

5. 実習科目のTA制度とSA制度

井上：そういえば、思いだしたのは、SA^(注17)とかTAとかいう制度ね。

水越：ありました。

井上：あれも総合情報学部が始め出した。報酬も予算化して、ただ働きではなくてね、きちっと。

木谷：お金払って、やっていましたよね。

井上：それだけの対応をして、仕事をしてもらうという。あのTA・SA制度ね。

江澤：SAは初めてですね。TAは千里山の学部でも実績がありました。

井上：そうそう、そういうことも先鞭をつけた学部でしたね。

江澤：当初このキャンパスには大学院生がいないから、他大学の大学院生を募集して。

17) SA: Student assistants (学部生による実習補助員), 大学院生による実習補助員はTA (Teaching assistants) として区別している。

宮下：TAはそういうコンピューター教育が始まった時に、千里山でね、私の授業でもやっていたんですね。情報処理センターの小委員会で、TAをどのように活用するかということで、値段のことまで話し合っていたんです。

井上：文系の学部としては、TAみたいなものないからね。発想もなかった。だから、ここでTA、もちろん文系、理系関わらず、TAの役割あったですね。

宮下：そういう面では、それは導入しやすかったんじゃないかな。すでに、千里山でやっていますからね。前例があるということで。

木谷：うちでは、もうだいぶ昔からやっている。

江澤：最初からやっていたからね。

谷本：先生方のお話を聞いていて、入試制度といい、学生評価の採り入れといい、カリキュラムの策定といい、TAやSAの制度を作ったことといい、文理総合という形といい、全部が新しい、とても新しい学部を作ったんだなという感じを受けました。

6. 大学院の設置

木谷：その次に、大学院を作るのが大変でした。あれは大変でした。理系、文系両方ありました。それがなかなか大変だった。水越先生が学部長なられて、高木先生が学部長終わられて、大学院の研究科長予定者として、進められた。その、なかなか、理系、文系それぞれいろいろ考え方ありましたし、それ大変でしたね。

水越：僕は2代目だったでしょ。さっそく大学院の話が出てきてね、学部はまだ十分固まってないのだけれども。かと言って、大学院に行かせないことにはいかない、学部から上が切れてしまったのではダメだということだね。こんなに早く大学院作るか、という気持ちはあったんですけど。とにかく修士課程を作らないとダメやということがはっきりしてきましたね。それでまあ井上先生や高木先生とも相談して、とにかく大学院を設置すると、問題は教員の業績審査。こっち（学内）でするわけにいきませんから、向こう（当時の文部省）でするわけですから。それで、結果が通った人は問題ないけれども、もういっぺんということが付いた人には、我慢してもらって、また業績上げてもらって、ということをして、一件一件、説いて回るのはつらかったです。でも、やっぱり先生方ががんばってくれて、そのことができて初めて、ああ、これで学部4年間と上に2年間の修士課程ができて、こ

れで一応格好ついたなという風に思いますね。

井上：修士課程を作った途端に、次に博士後期課程も作らないかん。これも同時並行にやっていたんですよ。だから、ものすごく忙しかったんですよ。

木谷：設立の時って、だいたいそんなもんですよ。

水越：みんな、そうですね。

井上：文理総合型というテーマを上げながら、ずーっと課題として追求してきましたね。その時代時代の中でね。いろんな先生方の個人的解釈もありましたが、でも、文理総合という理念を手放すということはなかったわけです。

木谷：一番の典型は、学部は1学科だったんですけど、大学院が2つの研究科に分離している。

谷本：水越先生は、大学院で大変だったとおっしゃっていたのですが、どう大変だったか、もう少しお話いただけませんか。

水越：まあ、そんな言うまでもないと思いますけれど。大学院というのは、作ると言っても、全部、文部省の認可があるわけですからね。一人一人の先生方、このように理系の先生と文系の先生とおられると、理系の先生の業績と文系の先生の業績、そういうものは違いますよね。一律に言うわけにいかない。もう学位も取っておられる人とそうでない人もおられるし。そうすると、一人一人、大学院担当してもらうためには、これを出してもらわなければならないということを説得して回らなければいかんわけです。これは、回るのは一日3人が限界でしたね。その先生のプライドもあるし。納得してもらうために、まずこっち、学内が納得してもらわないかん。一生懸命に言ったら、先生方、非常に気持ちよく協力していただけだと思います。けれど、やっぱりね、いざという時になってくると、そりゃもう、口で言っとなようなわけにいきませんので、みんなでがんばって、切り抜けた。

井上：なかなかね、微妙な問題なんですよ。

水越：微妙なんです。



木谷晋市先生

谷本：そこはあんまり語れないお話なんですか？

木谷：2年間あって、調査が1年、文部省と交渉してどういう設計にするかに1年、2年審査みたいな形になりますんで、2年目に、学部の4年目なんですけど、その時、最終の申請を出して、そして、教員審査と設備等審査、両方ありますから、教員では大学院のゼミを指導できる、要するに学位を出せる先生と授業だけで終わる先生とそれもできない先生と、その3つが出てくるわけですよ。その3つについて申請して、ある程度の人数の教員を揃えて、初めて大学院が認可されるわけです。そのプロセスが結構、大変で、まず、大きな設計として、学部は文理総合の形で学科になっていますから、じゃあ、大学院はどうするか。考え方が理系の方と文系の方、なかなか一致しないわけですよ。しかも、教員をまた揃えないといけないとなったときに、どういう形で申請を出すんだという問題が出てきますので。カリキュラム設計を教員に合わせて、どういう形で設計するんだということで、なかなか一致するのが難しかったということだろうと思います。

水越：そういう意味では非常に難しいことだったと思いますけれども、しかし、やっぱり、大学院をきちんと通さないことには、学部だけというわけにはいきませんから。上（大学院）をどういうふうに揃えるかってことでね。理系の先生には、比較的理解もいただけたんですけども、語学の先生もあるし、文系の先生もあるし、そういうのも全部となると、そりゃとてもじゃないけど、百貨店みたいなもんですからね。全部が一斉に揃ってなんて、そんなハッピーエンドにはいきませんわ。外から見ると申請がスーッと通ったように思いますが、そうはいかんであって。文系と理系では、全然考え方が、違いますもんね。理系の先生はいいですけど、文系の先生をあちらに通す。それから、語学だけの先生というのがおられる。

木谷：学部の授業の構想に、文部省を通す時には、授業科目の中身を全体のカリキュラムの構想の中で、どういう位置付けにするんかということも出てくる。

水越：それをね、説明せなあかんから。

木谷：専門性の関係でうまく整合できないんですよ。ご自分のやってる研究とか、どういう論文を書いているかということと、担当するカリキュラムが適合するかということですから。カリキュラムは総合情報学部としての体系がありますから、その中にどう位置付けていくか。これがなかなか作文するのは難しいところがあるんです。

井上：教員審査というのはね、一番難関でね。

谷本：そうですね。

井上：人でしょ。絡むのは。そやから、建物建てるみたいに、お金積んだらというわけにはいかんのか。そのどういう審査会に回されるか、文部省の方で、どういう人が審査にあたるか。

木谷：専門領域ごとに違いますから。

井上：専門領域が違うでしょ。それもはっきりしない。だんだん分かってくるようで分からない。推測ですね。

木谷：一応非公表ですからね。

井上：公表されないからね。申請しているカリキュラムの、自分が担当している科目にね、合致した業績持ってないとね、いくら他の領域でその先生が著名でもあかんのですね。だから、そのところが合っているか、合っていないかとかね。難しいわけです。

木谷：ところが、各自の科目を、業績だけでは、カリキュラムを体系的に作るわけにいきませんから。

井上：先生方の業績は横へ置いて、そして、カリキュラムを独自に考えとるわけでしょ。カリキュラムのここを担当していただくのに、果たしてその先生はそれに対応した業績をお持ちかと。そこが審査の対象になります。なかなか難しく、かつ微妙な。

宮下：もう終わったことなんで、こんなこと言うたらあれやけど。たとえば、私やったら、ずっとやっていたのが、いわゆる、専門領域が材料系なんですよ。そうすると、人から見たら「材料系なのにコンピューターのことやっているんですか？なぜですか？」って、聞かれるわけですよ。その都度に説明しなければあかんで、あんまりそれ言わんようにして。実際そうなんですよ。工学部で、材料系できて、コンピューターやっている。例えば、今でいう溶鉱炉とか、そういうのはみんなコンピューターで制御してるわけなんです。センサー付けてね。それをみな化学者がやっているわけです。コンピューターの専門家というより、化学者がやるとるわけですよ。溶鉱炉の中での化学反応のことが分かっている人が。そういうことが、みんななかなか分からへんわけです。「材料いうたら鉄？」って、鉄の塊くらいしか分からないわけですよ。なんでコンピューターなのかと。その説明が長くなるわけね。そうするとこっち側がやっている研究、統計解析、データ解析にコンピューター

ーを使うんだという説明をするんですよ。そうして、データ解析でこういう業績があるということ、論文なんかに載せていますからね。そういうことを主にして書くわけですよ。そしたら、こういう方面でこの科目は持てるなということになります。だから、書き方にもよるわけね。実際そういう風にしてコンピューターでデータ解析をやり始めたんですけど、人に説明しようと思ったら、いろんなこと言わないといけな。「なるほどな」という風に理解してもらうまでね。そういうことが各人でみなあるわけです。それを水越先生が説明して回って、そういう風を書いてくださいと言わんとあかんわけです。（他の先生方は）なかなかピンとこないという。ずい分ご苦労があったと思います。

水越：いろいろアイデア出していただいて、うまくやっていたいて。

木谷：M〇合の審査の時に、古田さん^(注18)が「マルゴウ通ったから」という風に電話かけてきたらしいんです。家内が受け取りまして「マルコウ？高齢者出産？なんのこと？」って、間違えたらしくて。

井上：初めて聞く人、わからんもんね。

水越：あのときは古田さんにも本当に迷惑かけたなあ。

7. 遠隔教育

井上：大学院に社会人を受け入れるということは、都心の中でそういう講義の場を作らないかんとということがありましたね。

木谷：ですから、ちょうど2年くらいたったところで、大学院コースをもう作らなきゃいけない、ということですね。

井上：実際に遠隔教育を天六キャンパスと繋いでやったんは、大学院の認可がなってからでしたよね。

木谷：ですから、2年。高木先生が2年半やられて、水越先生になって、高木先生の終わりくらいから、大学院を作るという方向が、マスターの申請について文部省と交渉することに

18) 古田均教授は水越教授が学部長をされていたときに学部長代理（現在の副学部長）を任された。また、その後、第3代目の研究科長を努められた。

なりますよね。2年間くらい要りますから。その中で議論をしたんですね。

井上：天六キャンパスと繋いで、遠隔教育やるということは、「ねばならない」ということだったんですね。私もやりましたよね。あれ、うまくいかなくてね。機械がね。何秒間かのズレが起こるとかで、いろんな問題があって、改良もいろいろしていただいたけども。結局、その時思ったのは、いささかあきらめの気持ちもあったけれど、機械には、結局人間の方が慣れるしかないということだった。

木谷：機械に合わせるんですね。

井上：もう慣れてくると全然腹も立たなくなった。「結構使えるやないの」みたいな心境でやっていましたね。

水越：私はね、同時に映像でやり取りするということは、ビデオがあるわけですから、授業案と一緒にセットにして学生に見せられて考えさせれば、もう一つ、彼らの意見が出る。それをこちらでビデオ撮っというて向こう送ってやると、ワンクッションおいた方法で僕は主にやりましてですね。マルチはそのためにはとっても使いやすい。

井上：僕は遠隔といっても、水越先生のようにできてなくて、ただ講義しているのをそのまま流すというだけの講義でしたけれども。だけど、質問を受け付けてやれるという双方向システムにはなっていたんでね。質問もボタン押してから、カメラがグイーと回りよるわけね。その間、2、3秒間隔があいてしまう。でも、あの思い出は僕も懐かしいですね。天六で講義して、高槻へ流すというやり方で。時には高槻へ出て天六へ流すということをやったんですよ。やっぱり直接に顔を見ながら話すということも必要じゃないかと。遠隔だけでやっていて、直接顔を合わせたらね、「ああ、君か」とやっていたからね。やっぱり、両方使い分けるとね、結構、できるんだなということを実感しましたね。あれも、思い出ですね。

8. 大学院における産学連携

木谷：もう一つ大学院の80人定員というのがあります。これが、なかかなで。

井上：定員埋まらない。

木谷：今、40人～50人が限度です。最初は、ある意味でビジネススクールを先取りしたような

ものを構想していたんですね。

谷本：そこでも新しい取り組みがあったんですね。

木谷：まずビジネススクールについては、まだ日本では全然できてない時に、その天六学舎を使って、街の中にサテライトキャンパスを作って、ビジネス関係の人を集めて、というような構想を持っていたんですね。なかなか難しかった。最初は高木先生とかの顔もあって、いろいろ集めることできたんですけど…。

井上：学部を作る時から、高木先生の中には、もちろん大学院、修士課程から博士後期課程まで全部作るという構想がありました。そのときにやはりその、実業界や産業界との関係をね、どうつけていくかということをお早い段階から考えておかないといけないという想いがありましたね。

最初、学部作る一年前に総合情報フォーラムという企画を立てました。それは、産業界とアカデミズムとがね、協同しながらシンポジウムやったり、研究会やったり、そういうのを持とうと。それは学部開設の前に2回、やったんですよ。OMMビルで1回、千里サイエンスセンターで1回。それは産業界からいろんな講師に参加してもらって、我々の学部からも講師が出て、発表会やって、シンポジウムもやるとか。そういう総合情報フォーラムというのを、学部と関西財界と実業界とつなげて、恒常化できないだろうか。あるいは会員制にするとかね。そういうことを考えながら総合情報フォーラムをやっているということだったんだけど。開設前は学部の宣伝もせなあかんでしょ。そのお金は出ていたわけね。だから、産業界の人に、総合情報学部はこんな学部です、ということを知っていただかないと、今度就職あるからね。その学部を知っていただく意味も兼ねて、いかにその連携を図るか。そういう接点を作っていくということはあったんですけどね。ところが、学部が始まりましたね。1回やりましたかな。ところが、みな忙しすぎて、つまり、そういう企画を立てたら、誰にスピーチしてもらって、誰をシンポジウムに呼んで、どの産業界にはどんな人がおられてと、全部こちらで企画を作らないかんのですね。学部開設前のシンポジウムなんかはね、僕とこに回ってきて。その人選や交渉など大変でした。事務局があればね、また別なんでしょうけども。それはともかくとしても、産業界、社会と学部と連携をつける道筋を何かつけたいということはあったんですけどね。総合情報フォーラムに賭けた当初の夢は実現しなかったですね。

木谷：当時は産学連携というイメージは、まだ賛否両論というか、大学はアカデミズムであって、産業界とくつつくべきではないという考え方も一方にはあって。もっと産学共同をしなくてはいけないという考え方ももう出てきてたですけども。関西大学は割と保守的な

ところがあって、ちょっと否定的なところが結構強かったですね。その点で、それを越えていくというのはなかなか大変だったのではないかと思います。大学院でもそうで、夜間開いて産業界から人を呼んでという考え方が、なかなか新しかったんじゃないかという風に思います。



谷本奈穂 先生

谷本：そこも総合情報学部が新しい時代を先取りしているんですね。

井上：でも、なかなか現実化するについてはね、まあ、難しいこと、多々あったわけでしょうね。

木谷：理系の方はだから、昼間中心になっていたんですけど、文系の方は最初5時間目からでしたかね。昼間の5時間目、6時間目、7時間目を授業枠^(注19)にして、という。そういう社会人が来られるような設計をしていたと。

谷本：今でもそうですね。その名残で。

井上：だから、もっと産業界からね、定年後の人じゃなくて、現役の30代、40代とか、現場にいる方々に入学して来てほしいという願いを持っていたわけやね。なかなか難しかった。

水越：なかなか難しいですよ。ずっとということは。

木谷：天六という場所もちょっと難しいところあるんですよ。天六でもかなり珍しかったんですけど、その後、JR大阪駅の近辺に大阪市立大学とか関西学院大学とかビジネス系の社会人教育をしてくれるようなところが、いくつもJR大阪駅の近くに出てきましたんで、なかなかその後の対応が難しかったというのはあると思います。

9. 院生の教育

木谷：R棟のほかに、大学院棟（D棟）ができたというのが、結構、後の事業とかやっていくのに重要だったと思うんですけど。大学院棟を作るのは、結構、また大変な交渉だったん

19) 現在は4時間目から。

じゃないかと思います。

宮下：私が学部長になったとき、宿題を前任学部長である水越先生からいただいたのを、木谷先生が学部長の時にちゃんとやってもらいました。ドクターコースの在籍時にいくつかの専門科目を選択にして、今まで科目取らなくてよかったのを、いくつか単位を取れるようにした。

木谷：ある意味、文理総合させたやつですね。マスターが半分に分かれてましたので、それをどちらからでも取れるようにしたという。マスターの時に制度を変えたという。2つに分かれているけど、実質何も分かれていないという不思議なシステムにしてしまったという。さらに博士後期課程では、また一本に統合されている。あれもなかなか。ちょっとややこしかった。あれはなんでや？という。

井上：でも、社会人が、30代40代の会社でも中堅のクラスの人が、社会人で入ってきてくれた大学院は楽しかったなあ。

木谷：はいはい。

井上：議論がよくできて。楽しかった。

木谷：お話ができるわけですね。

井上：学部から卒業と同時に進学してきた学生は聞いているだけやねんな。「君らも発言せんと」と言うても、「聞いているだけで勉強になります」って。そんな調子やったけども。やっぱり現場で働いている年頃の人が勉強したいということで来はると、我々も刺激を受けて楽しかった。

水越：全然違う。学生だけじゃなく教員にとっても良い刺激になった。

10. 就職指導

谷本：優秀だった一期生たちはどういうところに就職されたんですか。

水越：私が知っているのでは、江戸川大学とかね。今もう教授ですよ。

谷本：研究職ですね。

水越：研究職に行っているのは、横浜にも行っていますし、東京都内でも2つ3つの私立の、今、教授になっていますね。

谷本：活躍されていますね。

水越：活躍しています。そういう連中、優秀でしたね。井上さん言われるように、本当に。

井上：あのとき、時代はどうだったんでしょうね。学生から就職できないってね、そんな相談受けたことなかった。

木谷：いや、逆にですね。学校推薦を受け取らないですよ。

谷本：いらない？不要？

木谷：推薦やったら、決まってしまうから。もっといろんなとこ自分で決めたいといって。

谷本：縛りがいい方がいいということですね。

井上：そういう意味では、思い出してもありがたかったですよ。学生からそういう深刻な相談受けなくて、だから、学生との関係ではね、割と楽しい思い出しか浮かんでこない。

谷本：素晴らしいですね。

井上：恵まれた時代かもしれん。

木谷：宮下先生は最初の頃から就職主事やってらっしゃったんじゃないですか。

宮下：まあ、それでもあちこちまわりましたがね。いわゆる文理総合という説明が大変だったんですよ。それと、総合情報学部ですと言うたら、そんな学部があるんかと言われて。もうだいぶ経つとるときにも、そう言われたりしてね。やっぱり、それなりに苦労しましたけどね。

井上：確か手分けしてね。宮下先生が就職主事で、宮下先生のリストアップで1人10社くらい

回ってほしいと言われてね。夏休みに10社も回らないとあかんのかって。僕はだいたい放送局関係が多かったんやけどね。東京のキーステーションからみんな歩きました。それは学部の認知、認識をしていただかないかんという意味もあって。就職のお願いもあったが、学部の宣伝も兼ねて、ようけ回りましたな。

谷本：先生方が、回られて、ええ～

井上：直接。企業へ。

木谷：多分あの時は教授以上だったんじゃないかな。この学部は偉い先生が働くという場所なんです。

井上：ところがね、会社の名前だけいただくわけ。それで行ってくださいって。自分で電話してね。アポイントメントも自分で取って。

谷本：ええ～。先生方がですか？

井上：やったんですよ、みな。

宮下：行った時にうまくいかんときは、また違うところ行って、時間調整するとかね。1日に何件かまわらんといかんから、時間調整をやらんといけないのでね。アポイントメントはあらかじめ取っておかないと。なかなかうまく会えない。

谷本：開設当時の先生方には、足を向けて寝られないです。すごく大変ですよ。

井上：まあそういう、最初、企業に知っていただかないかんということで、その努力は各先生方ありましたよね。

木谷：一期生の就職というのは、非常に学部の将来にとっても重要でしたからね。

宮下：次の入学生がどのくらいか、就職率によって違うしね。だから、最初は予備校も含めて、学部の宣伝のために、もうあちこち分担してまわったわけですよ。それが終わった途端に就職で。企業にぎーっと、今度は2年先、3年先になったら、こういう学生が出ますのってということで、ずっと回ったわけですよ。

谷本：今、就職主事というのはキャリアセンター主事に名前が変わって。

宮下：役職名が変わって。

木谷：最初の5年から10年じゃないかと思いますわ。そういう形で企業回ってはったのわ。

谷本：草創期に。

宮下：企業回りをしてはる主事の先生は、ずっと毎年何件か受け持って回っておられますね。

木谷：今でもね。当時、総合情報学部では就職担当の委員会というのを置いて。

宮下：たくさんの先生方に委員になっていただいて、割り振って行ってもらった。

11. 教室棟（E棟）の増設

谷本：宮下先生が学部長だった頃のお話が聞けていないんですけど。

宮下：はい、だいぶいろんな話が出てしまいましたが、特に、特徴だったことだけお話させていただきます。私の頃になると、いろんな設備ができていたんですけども、(まだ)特に教育環境の方の、教室の設備が悪かった。例えばですね、B棟なんかは、一番古い建物になりますね。B棟はだいたい縦に細長いんですよ。人の顔が見えるか見えないかぐらいの。たとえば、TB301なんていうと、(学生が)遙か彼方というような。床面がタイルのままですよ。学生の出入りでもものすごくうるさいんですよ。だいたい騒音が高いんですよ。それともう一つ、一学年が、今550人くらいで、当時だいたい600人近くいたわけですけど、全員が入る場所がないんです。一堂に会して伝達するというようなセレモニーをやるというような時ですね。例えば入学式とか卒業式の時に集めてとか、いろんな就職説明会をすとかですね、そういう時の十分な場所がないとかですね。そういうこともあったので、大きなホールがどうしても必要だということがあった。それで、いろんな要望があったんですけど、1つ、まずはホールを作りたいということを考えました。それもね、できるだけ横に(広がった教室)。ということは、あまり距離を置かないということで、あんなうなぎの寝床のようなところ(TB301)では、声もよう通らんと。雑音でよくないということで、そういう設計を考えて、ずい分その当時の執行部の先生方、江澤先生を初めとして、しかもプロジェクターで映すということで、ソニーの最新のやつですね。一番大きいやつですね。それで、この距離で写したら、字がどのくらいまで読めるかということまで、

いちいち、寸法を測ったりしてですね、そういうこともしたりして、TEホールができました。だいたい横に展開するようなホール、あと教室もだいたいそういう設計で、全部、できるだけ先生と近い距離を保つようにということで、ですね。おかげで、教室の環境はずい分良くなったなあと思います。

江澤：横に広いタイプの教室は関大で初めてですよ。

宮下：そうですね。

江澤：その後、高槻ミュージックキャンパスの小学校にも横に広い教室ができました。これ便利やなって。

宮下：縦に長いと、やっぱり後に座ると見にくいですね。

木谷：TEホールの下のTE101やったかな、あれが一番使いやすい。

宮下：まあそういう、環境はずい分良くなったなあ。

谷本：それが、宮下先生が学部長の頃の教室増築だったんですね。

12. 学生の起こすさまざまなトラブル

江澤：あと実習環境でご苦労なさったのがウイルス問題^(注20)とかね。

宮下：そうそう、ちょっと大変でした。

江澤：指紋でログインの認証ができるようにした。

宮下：いろいろトラブルがありましたですね。

木谷：みんな学生は勝手に「俺のパスワードで入っていきなさい」とか言うて、セキュリティ問題^(注21)、起こっていたんで、なりすまして、誰かの悪口書いたとかね。そういうの、最初か

20) コンピュータウイルスに汚染されたメディア経由で実習パソコンが汚染された。

21) 実習用ワークステーションのunix系ソフトウェアを使って、教員のパスワードを解読してワークステーションのファイルを改竄するとか、学生のパスワードファイルをクラッキングソフトで勝手に解読して、

ら出ていました。

井上：あったねえ。

宮下：そういう問題がいろいろ、教育しとる間に出てきたということで。

江澤：あとはバイク問題^(注22)。

木谷：バイク問題は水越先生の時からもうすでにあつたんです。

江澤：だけども、宮下先生の時に対策を考えた。

宮下：ロックしてね^(注23)、強制的に。

木谷：ロックするかどうかは、私と当時の学生主任であった加藤敏幸さんと議論したんですわ。下手したら器物破損になるんでね。

谷本：何回か警告した後という？

木谷：そうそう、違法性阻却させるために何回か警告で、何回かお願いして、それで最終的に。

江澤：あれ見事に解決できましたね。

宮下：いろいろね、訴えられたりしないかと心配したんですけど、そういう時もこちらの責任でみなやろうということで思い切ってやって、みなさんのご同意も得て、ですけど、そういうことで実際やって、それは解決したということですね。



江澤義典 先生

他人になりすます偽メール送信事件などが発生した。

22) バイク通学は禁止されていたが、勝手にバイクで登校しキャンパス周辺の道路に放置して、周辺住民や市バスの通行妨害になっていた。

23) 市販のバイク用盗難防止錠を事務室に用意した。

13. 語学教育の専任教員

宮下：もう一つは学部内の運営では、やっぱり語学系先生方の移籍問題がありました。

井上：これは難しかった。

宮下：外国語の関係で、総合情報学部はこっち側でできたと。今度は全学的に外国語をしっかり教育せんといかんという話もう一つ残ってしましてね。いよいよそれが実施に移されるのにあたって、うちとこの先生を。

木谷：全学の教養の外国語教育を司る外国語教育研究機構というのを千里山キャンパスに作るうということになった。

宮下：今では外国語学部ですね。それにあって、移籍の問題があって。それで、ずい分大変でしたね。学長とも何回も話し合いして。こちらの先生にも了解を得るといふのが大変で。それで、結論的には、語学の、英語関係の先生は全部が千里山キャンパスに新設された機構に移られた。それは全部、ご自分の意思で。とにかく、学長には、全員が移られないかもしれないと思うけれど、ご自分の意思で移られるという方に移っていただくということで了解してもらい。最終的には外国語、英語を担当されていた方々ですけれども、各自にご自分の希望を出して頂きました。その時、いろいろ注文を受けて、後でまたいろいろあったかもわかりませんが、私としては、とにかくいろんな会議の中で、不利を受けないうようにということですね。それで、機構にも独自の教授会をもってもらい、将来的には大学院も担当するという条件も出したりしてね。

井上：英語の教育という件では最初ね、CNNが日本の総合情報学部を注目してくれていたんですよね。CNN ジャパンの支社と連絡があって、テッド・ターナー^(注24)がね、東京に来た時には招待を受けました。高木先生と英語の北村先生と僕の3人が東京まで行きました。CNNは、ニュース報道を教育素材として提供していて、その英語素材^(注25)を総合情報学部提供したいという話があったんです。北村先生に、その話に大変熱心に取り組んでいただいて、話がかなり進んだんですよ。本当にCNNと教育提携みたいなのを交わして英語教育に生かそうと。

24) CNNの創設者 Ted Turner のこと。

25) 英語ニュースの映像ファイルと同時に原稿を英文テキストファイルとして提供する。

木谷：CNNを教育素材に使った。

井上：そうそう，教育の素材に使こうた。そういう話が進みかけたんやけれども，途中で消えてしまったんです。

木谷：画期的なものができたかもしれないですね。総合情報学部オリジナルのね。

井上：そういう意味で，総合情報学部がこの英語教育に力を入れてするというカリキュラムの評価は，テッド・ターナーにまで聞こえていたんですかね

宮下：それは確かにありましたね。

井上：意気込みはかなり，我々にもあったし，気運は燃えていましたけどね。

木谷：各クラス，全部同じテキスト使って，同じように授業するという。他では絶対できそうにないことを試みましたね。あの時は。

井上：新聞の全面広告を，学部開設の前に打ったやつね。そしたら，CNNインターナショナルの日本代表が参加しているんですね。シンポジウムに，呼んでいるんですね。こういう人を交えたシンポジウムやってね。

水越：なるほどね。

井上：ここに持参したのは，当時の新聞紙面のコピーですが，日経ですね。お金をかけず多くのスポンサーを協賛に入れています。日経新聞社の代理店の人が動かれて，シンポジウムの内容とか，講演内容を紹介する形で，学部開設前の広告として打ったわけですね。

木谷：英語教育とかいろんな試みが。

井上：いろんなことを夢見ていたんですね。

宮下：ちょうどその当時の関西大学がざーと変わっていく，その初めが総合情報学部であって。

谷本：いつも先陣を切っていますよね。

宮下：まあそういうことがあったんで、最初、木谷先生がおっしゃたように、大学院を作る時にどういう位置付けで、語学関係を持ってくるかということもあったと思いますしね。全体を含めて、そういう風になっていったという。そんな感じですね。しかし、みんなの思いがそれぞれあってね。それはそれでみなさん了解されて。

14. 文理総合の多様な教員

井上：学部運営でちょっと言い残した思い出ですが、学部がスタートした時、57人いましたね。とにかく全員採用という条件でした。年次ごとに人数が増えていけばよかったんですけど、そういうのは認められなかったんですね。最初から全スタッフを揃えろということで、一部の先生の着任時期がちょっと遅れたということがありましたが、それは、もう例外ということでした。

木谷：水越先生は2年目のご着任でしたね。

水越：僕はすぐには来られなかった。

木谷：三宅先生も2年目でして。

江澤：名和先生は3年目でした。

井上：他大学から、他の都市から、たくさん見知らぬ人同士が集まった50何人の教員集団ね。これの運営は大変だったんです。

木谷：それはたいへんだったと思います。

井上：まずお互いに知らないし、しかも文系理系の合体ですし、それぞれ出身母体が違うからね。とにかく、どうしたらちゃんと運営できるか。僕は最初の2年半の執行部でしたけども、もう教授会は2時間では終わらないんですよ。毎回、2時間でなんとかして終わりたいと思ってもね、3時間、4時間、時には6時間とかね。もう無茶苦茶に時間がかかる。

木谷：2時間で終わったことは一度もない。どんなに早くても3時間はかかっていました。

井上：それほどたくさん問題が…。みなさん、それぞれに意見をおっしゃるからね、もう大変なわけです。お互いに持っている文化が違うからね。なんとかせなあかんということで、

教授会だけの集まりじゃなくて、各先生方を何らかの委員会に所属していただくということで、たくさん委員会をつくりましたね。

水越：たくさん、できました。

井上：どっかに入っていたかと。

木谷：しかも複数入っていましたね。みんな。



堀 雅洋 先生

井上：そこで、今まで会ったことがない先生でもね、

面識を持って話をさせていただく。それから、学部共同研究に応募していただいて、研究の共同の場を持っていただくとか、いろんな工夫を凝らしました。

谷本：その話は伺ったことがあります。

井上：やっぱ、ああいう風にして、文系理系の人を交えたチームを組んでね、研究をしていただこうと。お互いに知り合っていただこうと。時には一緒に飲んでいただこう、というのもあったかもしれませんが。

水越：教授会の前とかに、そういう小人数のグループ討論会をやりましたね。それがまあ、そこで議論をやっておれば、教授会では絞られてきていますから。

井上：そうそう。そういう工夫したりとかね。できるだけテーマを決めてね、文理の総合テーマを決めて、共同研究でね、お互いに顔を合わせていただく。それと全学的な重点研究もできましたよね。あれにもできるだけ参加してもらって。他の学部の先生とも交流していただくとか。だからやっぱり、先生方の魅力は研究でしょうから、研究を軸にしたそういうサロンとか共同研究とか、そういうものをできるだけ学部に広げたいと。そういうことによって、共通のね、文化が少しずつできるんじゃないかと、そういうことを考えましたね。

谷本：最初は言語も違いますもんね。

井上：言語も違う。

木谷：日本語は日本語なんだけどね、意味が違うんですよ。

谷本：文系語と理系語と違う。

井上：でも、なんとかせないかんというね、そういう思いね。

15. 教員の人事

宮下：ドクターコースを作られた時に、初めは、やっぱり水越先生にお世話になりました。

木谷：高木先生から矢島先生に研究科長が引き継がれて。

宮下：人事は水越先生にさせていただいて、おかげで割とスムーズにいったと思うんです。

水越：いやいや、そんなあれじゃないですけどね、ともかく…

井上：水越先生なりのご苦労があるんです。そやけど、あんまり言われへんから。

木谷：それはマスターの時も同じですから、大騒動ですから。

水越：あのねえ、全員が通れば問題ないんですけど、いろいろありますからね、その人にどう
いう説明をするかっていうのがね。

井上：難しいですね。

水越：難しいんです。それは研究室まで訪ねて行って、っていうわけにいかんですからね。高槻駅の横の喫茶店とかで話したり。そんなこと苦勞しましたけどね。審査を受ければ、通る人は通るし、通らない人もその人の問題じゃなくて、その人の専攻とずれとるということなんですよ。きちっと、その人の本当の専攻で出してもらえばいいけど、学部の都合で無理してこうやってもらう。そうするとやはり専門家（当時の文部省）はいっぺんに見抜きますから。しかし、かというて、その人にはそういう結果が分かっているけど、出してもらわないといけないとかね。あの頃は、本当に僕はどうしたらいいのかと思って。

木谷：もうひとつ、うちの場合は、実務経験者の方で学部教育を担当してらっしゃる方、結構いらっしゃる。そうすると、大学院なんかの設置基準の論文審査で、ちょっと苦しいとこ

ろがあるんですね。それは難しいことだったと思います。

水越：最初の時は、そりゃ、お互い無理なところがあって当たり前ですからね。新しい学部作るんですからね。それにそっくり合う人が、初めからいるわけじゃない。無理してもらってね。

木谷：今は少し緩くなつてはきているんですが、あの当時はそんなに緩くはなかったんで、なかなか、難しかったですね。

井上：あの当時は文部省でしょ。ほんまたいへん。そやから、この前、田中真紀子大臣が不許可にした、あの事件あったでしょ^(注26)。あんなこと考えたらぞっとしますね。莫大な土地を手当てして、建物も建てきて、全部終えて教員組織も作って、それで「NO」なんて言われたら…。

木谷：事前に審査して、2年間打ち合わせしますからね。

井上：そう。2年間ずーっと打ち合わせして。

木谷：通るように。これはダメだとか、これだったら通りませんよとか。これだったら人間ももう少し増やしてくださいとか。いろんな…。

井上：役人が言わはることを聞いて帰ってきてね。細かいことまで修正して、2年間かけてね。作り上げてね。そういうプロセスみんなたどっているんです。

木谷：設置基準に合うものをつくっていくわけですから。

水越：むずかしかったですね。本当に。

宮下：人事は難しいですね。

木谷：マスター作る時も、ドクター作る時も、そういうことだったんじゃないですか。

26) 文部科学省：大学等の設置認可・届出制度，http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ninka/main3_a3.htm。

■ 終わりに

谷本：そろそろ終わりの時間にきております。本日はどうもありがとうございました。すごく面白い話が聞けました。とにかく全て画期的だったということが分かりました。総合情報学部が時代の先取りをしていた、と言ってもいいくらいのことを、たくさん行っていたんだということ。今はそんな風でもないと思うんですけど、特に初期は異分野の先生方が来られているので…。

木谷：文理総合という。これがなかなか。

谷本：はい。その点でご苦労されたんだということが分かりましたし、先生方が非常にご苦労されて、今のこの発展の礎を築いてくださったんだということがよく分かりました。

井上：今はだけど、あんまり苦労したという気はないんですよ。かえって、いろんな変化があって楽しかったなって。今は、ですよ。

木谷：それなりに楽しかったですよ。

宮下：大変でした。それと予算が、この学部は潤沢だったわけです。

江澤：実習費が。

宮下：理工系以外の他学部の実習費はないですから、科研などに申請して各自でちゃんと取ってこないとダメなわけですよ。

谷本：それは大変ですね。

宮下：そのこと思うと、いいこともありますね。

谷本：ここは、恵まれ過ぎていますね。

水越：あらためて恵まれていたと思います。本当にお世話になったと思います。恵まれていました。

木谷：高木先生・井上先生から宮下先生までの8年半が、マスターとドクターを作り、それからいろんな設備を作り、この学部の、ある意味で基礎だと思います。

谷本：本当に今日お話を伺って、先生方のご苦労と、なんと言おうだろう、画期性がよく分かったと思います。長時間のお話、ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。